

第3節 群馬県内出土手焙り形土器について

高林三入遺跡B区10号土坑からは、手焙り形土器の面片1点が出土している。群馬県内では出土例(5例目)が少なく貴重な資料である。

手焙り形土器は、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけて作られた土器(土師器)である。鉢形の上部に覆いが付き、その一方に口が開く形状をしている。この特異な形をした土器は一体何に使ったのか?他の土師器(坏・甕・壺など)に比べて著しく個体数が少なく、また墓(周溝墓・古墳)から出土することが多いので、祭祀的な機能が考えられる。また、内面に煤が付着しているものも多く、火を焚いていたことは確実であり、覆いは火を守るためと思われる。用途としては、照明か手焙り火鉢かと思われるが祭祀的な側面を重視するならば、聖なる「火」を灯した照明として使われたのだらうと思われる。

そこで、本稿では、県内出土の手焙り形土器出土遺跡とその概要を紹介したい。県内では、第249図(第36表)のように、5遺跡から手焙り形土器が出

土しているが、幅遺跡・公田東遺跡以外は破片資料である。今回、本遺跡B区10号土坑から手焙り形土器が出土したことは大変意義深く、該期土器研究の上で重要な資料となると考える。

本稿をまとめるにあたり、当事業団大木紳一郎氏からご教示・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

引用・参考文献

2005『年報23』((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)

2002『上滝榎町北遺跡』

((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)

1997『棚島川端・公田東・公田池尻遺跡』

((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)

1998『手焙り形土器の研究』(高橋一夫)

2000『壺から埴輪へー3・4世紀の東日本における畿内型埴輪の受容ー』(明治大学考古学博物館)

1964『弥生土器集成 本編』(小林行雄・杉原莊介)

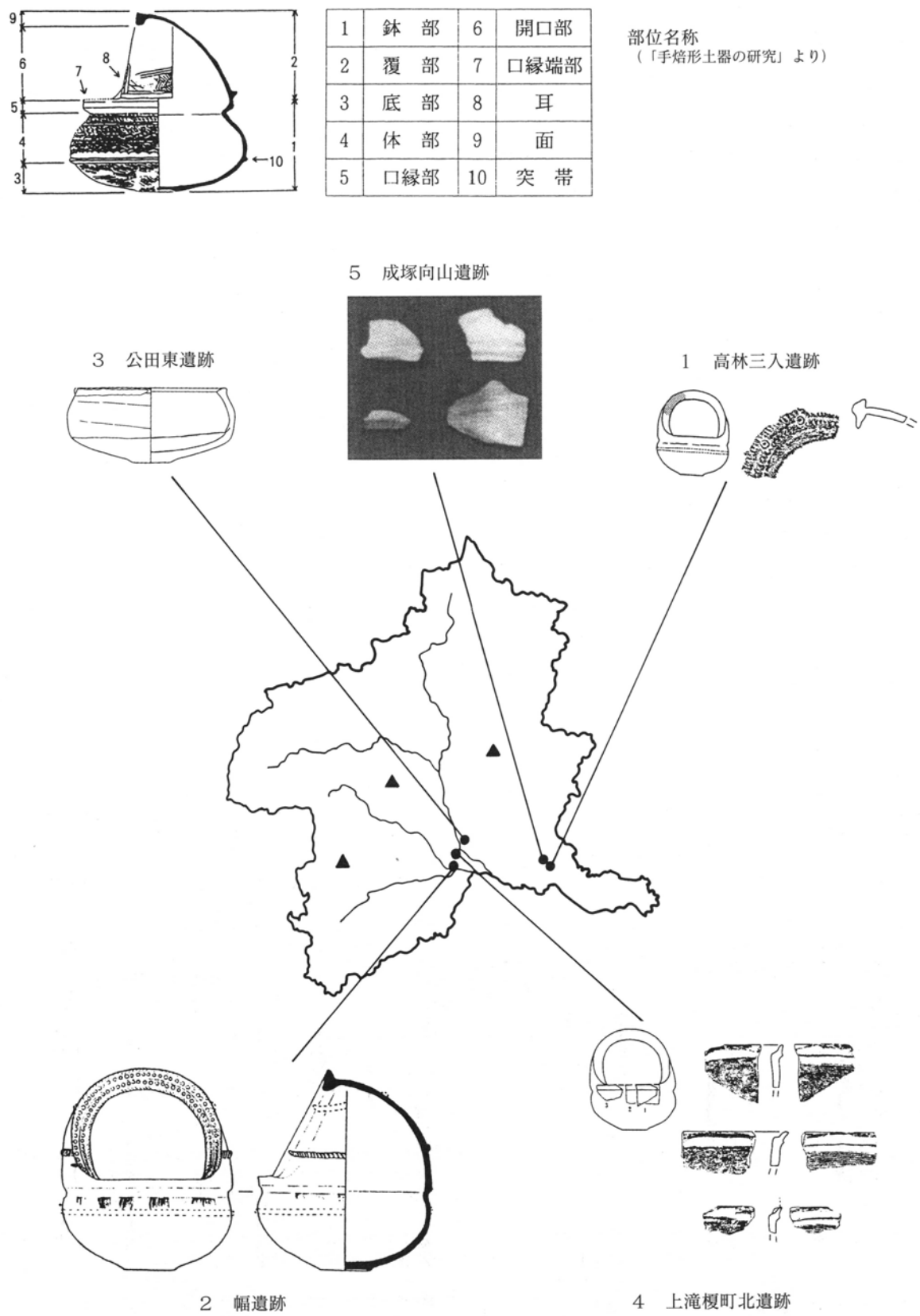
第37表 群馬県内出土手焙り形土器

事業団:(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の時期	文献(報告書等)	土器の年代
1	高林三入遺跡	太田市岩瀬川町	B区10号土坑	古墳初頭	本書	
2	幅遺跡	高崎市上並榎町	溝	不明	弥生式土器集成本編(弥生式土器集成刊行会)、新編高崎市史資料編1原始古代(高崎市)	古墳初頭
3	公田東遺跡	前橋市公田町	I区2号周溝墓	古墳初頭	棚島川端・公田東・公田池尻遺跡(事業団)	
4	上滝榎町北遺跡	高崎市上滝町	E区遺構外		上滝榎町北遺跡(事業団)	4世紀初頭
5	成塚向山古墳群	太田市成塚町	1号墳(方墳)	古墳前期	年報23(事業団)	

第38表 群馬県内出土手焙り形土器観察表

番号	遺跡名 遺構名	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	高林三入遺跡 B区10号土坑	面片	長さ 11.8 幅 5.6 厚さ 0.4~0.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③5YR7/6橙	櫛で規則的な刺突痕を施す。円形貼付2ヵ所あり。調整は丁寧な横撫で。	本書
2	幅遺跡 溝覆土	完形	口径 11.4 底 4.8 高 19.8	①粗砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③明褐色	鉢の部分に1条と覆いの部分に2条の粘土紐をめぐらし、それに櫛描きの列点文をつけている。覆いの部分の口縁端は内外に厚くして幅を持たせ、その周囲に篋による刻み目を内側に竹管の刺突文を連続して飾っている。	弥生式土器集成より転載。
3	公田東遺跡 西側周溝	下半部(鉢部)	残存高 7.4 口縁部径 15.0 体部最大径 16.7	①砂粒を多く含む ②酸化焰 不良 ③浅黄色2.5Y7/3	体部は偏球形をなし下半接合部で屈曲する。底部は突出する平底。胴部内外面横撫で、内面に接合痕が残る。	報告書より転載。
4	上滝榎町北遺跡	口縁部片3片		①細砂粒 ②酸化焰 ③	口縁部断面はS字状を呈し、内外面に刷毛目調整が施される。口縁部内側に接合痕と思われる粘土塊がある。弥生後期～古墳初頭(4世紀初頭)	報告書より転載。
5	成塚向山古墳群	口縁部片など		不明	1号古墳から4片(他に数片あり)が出土	未報告



第251図 群馬県内出土の手焙り形土器